

序

奈良文化財研究所は、文化財保護法の理念に基づき文化財を総合的に扱う研究所として、設立以来、調査研究成果の公開・活用の事業を進めてまいりました。その一環として、埋蔵文化財の記録類の適切な作成・保管と情報発信にむけたデジタル技術の導入についても、いち早く取り組んできたところです。

2015年からは、文化財情報研究室が中心となって全国遺跡報告総覧を公開し、全国の文化財・遺跡情報の集約と発信、文化財デジタルデータの研究利用と展開を図っています。また、文化財担当者研修においては、遺跡GIS課程および文化財デジタルアーカイブ課程を開講し、デジタル技術を用いて、時空間情報の分析、調査記録類および報告書のデジタル化、文化財コンテンツの公開・活用などをすすめるのに必要な知識・スキルの習得を促進しています。さらに今後は、世界的なネットワークの中で、日本も相応の役割を確実に果たしていく必要があると考えています。

2017年には、イギリス・ヨーク大学の Archaeology Data Service（考古学情報サービス）と奈良文化財研究所が共催した考古学デジタル情報セミナーにおいて、Julian Richards 教授から考古学情報の日欧での事業連携の提案を受けました。このことを受け、2019年には、欧州全体における考古学情報の統合および相互連携の推進を目的とする ARIADNE Plus 事業に奈良文化財研究所も参加することとしました。

本書は、デジタルアーカイブの理念に基づき、文化財デジタルデータの標準化・長期保管とデータの再利用を日本国内においてさらに普及することを目的として、ヨーク大学の Archaeology Data Service（考古学情報サービス）が米国の Digital Antiquity 等と共同で作成したガイド（手引書）“Archaeology Data Service/Digital Antiquity Guides to Good Practice”を日本語に翻訳（仮訳）したものです。

本書の作成・公開に深いご理解とご協力を賜りました Julian Richards 教授および関係者各位に厚く御礼申し上げますとともに、本書が広く利用され、国内における文化財デジタルデータの長期保管および公開・活用の事業に資することを期待しています。

令和4年2月

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所
所長 本 中 眞

序

奈良文化財研究所が Archaeology Data Service/Digital Antiquity の Guides to Good Practice を日本語に翻訳されたことをうれしく思います。イギリス・ヨーク大学の Archaeology Data Service は、1997年に本ガイド（手引書）の開発を始めました。2009-2010年には、アメリカの Digital Antiquity と共同でこれを改訂しました。

現在、本ガイド（手引書）はイギリス・アメリカに限らず、ドイツ、スウェーデン、オランダのデータリポジトリでも採用されています。

考古学者は誰でも独自のデータ作成方法を持っているはずですが、そのため、本ガイド（手引書）の目的は、考古学者にデジタルデータの作成方法そのものを教えることではなく、データの長期保管を保証するファイル形式の選択や、データの再利用と長期保管に配慮したメタデータの作り方などに関するベストプラクティスを示すことにあります。

近年、多くの国では、研究者にデータの長期保管とオープンアクセス化をなすことが期待されています。しかし、そのためには研究者自身が、オープンアクセスにたえられるデジタルデータアーカイブとはどのようなものであるかを理解する必要があります。奈良文化財研究所が発行する本ガイド（手引書）日本語版は、日本考古学にとって有益なものになるに違いありません。

Archaeology Data Service
所長 Julian Richards